網走月報

発行所
天理教網走大教会
布教部出版広報掛
〒093-0073
網走市北3条西6丁目
TEL 0152-43-2227
FAX 0152-44-2227

立教186年
活動方針

「教祖のひながたを目標（めどう）に
全教会心定めの達成」

◇全教一斉にをいがけデー◇

９月28日（木）～ 30日（土）

教組140年祭 年祭活動のこの旬に、教祖のひながたを

少しでも感じさせて頂けるよう、喜びの種まきをさせて

頂きましょう！

詳細は各教会へお尋ね下さい。

大教会のHPがご覧になれます！
月報には掲載されない写真もいっぱいです！
ぜひ一度ご覧下さい♪

大教会八月月次祭

大教会８月の月次祭は、12日午前９時30分から大教会長祭主のもと、執行された。

大教会長は祭文で、親神様の御守護に御礼申し上げた後「こどもおぢばがえりに於いては、大勢の子供達が喜びいっぱいのもと参加させて頂き、親心を頂戴する中、期間中、何事もなく日程を無事終了させて頂きましたこと厚く御礼申し上げます。更に七月は、初席者一名、用木一名、修養科修了者一名、教人講習修了者一名の人の御守護を賜りましたことも重ねて心より御礼申し上げます。」と奏上した。

その後座りづとめ・十二下りのてをどりが勤められ、参拝者は共に勇んでみかぐらうたを唱和した。

神殿講話　三幣正志　役員

神殿講話全文

教祖百四十年祭に向かっての年祭活動一年目も折り返しを過ぎ、先日は、四年ぶりにこどもおぢばがえりが開催されました。期間中は猛暑日が続きましたが、大勢の子ども達が笑顔で、夏のおぢばを満喫しておりました。

そして、その陰で、冷たい麦茶を配り、各行事の受付や出演者として、受け入れひのきしんに励む中学生、高校生の姿が、とても輝いていたことが印象的でした。この光景を親神様・教祖は、どのような御心でご覧下さっていたことかと思います。

ところで皆様、もしも「教祖と自分の心の距離は、どのくらいですか？」と聞かれたら、皆様はなんとお答えになりますか？以前の私は、教祖が日中にお座りになられている教祖殿と御用場くらいの距離感でした。しかし、ある事情がきっかけとなり、今では合殿から教祖にお話させて頂ける距離に縮まったように思います。そして、この年祭活動が始まってからは、毎日教祖のお近くに行きたいという場面が増えているように思います。

さて、ご承知の通り、この世の元の神・実の神である親神様が、人間を創造されたご本心は「陽気ぐらしを見て、共に楽しみたい」とのお気持ちからでありました。この親神様の元のお気持ちを、私達は「元のいんねん」とお聞かせ頂いております。

以来、天保九年十月二十六日、約束の年限がやってきたことにより、教祖は魂のいんねんによって「月日のやしろ」とおなり下され、その後五十年間、陽気ぐらしへの手本の道を、御自らお示し下さいました。このお姿を、私たちは「ひながたの親」とお慕いして、教祖にもたれながら、日々心の定規にしております。

そして、明治二十年陰暦正月二十六日、九十歳でお姿を隠されましたが、その魂は今も御存命のまま、たすけ一条

の先頭にお立ち下さり、日々、にをいがけ・おたすけに励む、私たちようぼくの背中を後押して下さっておられます。

時に私達は、にをいがけ・おたすけを通して、珍しいご守護の姿をお見せ頂くことがあります。この有難い姿を「教祖存命の理」と拝して、たとえ、どんなに辛く苦しい道中であっても、それが解決の見えない事情や身上を頂いた時でさえも、教祖、教祖とご神前に頭を垂れてお縋りし、時に感謝の涙を流しながら、時に咳込む息を忍びながら、人のたすかりを祈念しているものと思うのです。

このお道が、何故だめの教えと説かれているのか、それは、教祖がお通り下さったひながたの道があるからです。そして、教祖のひながたこそが、陽気ぐらしへの「道しるべ」であり、お道の命であると信ずるところであります。改めて、本日の講話では、御存命の教祖ひながたを、皆様と一緒に身近に感じ、そのご苦労を幾分なりとも味わせて頂きたいと存じます。その上から、明治二十二年十一月七日のおさしづを紐解いて話を進めたいと思います。

真柱様は、この度の『諭達』で、「この五十年にわたるひながたこそ、陽気ぐらしへと進むただ一条の道である。」と述べられています。又、二代真柱様は、『第十六回教義講習会』において「ひながたは何であるか、教えであります。従うことであります。」と、お道の教えは、只、覚えるだけにとどめず、ひながたを実践し、素直にたどることが大切である、とご教示下さいました。

明治二十二年十一月七日のおさしづに「ひながたの道を通らねばひながた要らん。（略）ひながたの道より道が無いで。」と、実にこのおさしづで、十八回もひながたという言葉を使われております。

教祖の年祭は、三年千日と日数を仕切って、ひながたの道を、普段以上に意識して通るべき年限の目安としてお示し下さった区切りである、とお聞かせ頂きます。大切なポイントは、①ひながたを普段以上に意識して通ること。②ひながたを素直に実行すること。だと思います。

おさしづに「口に言われん、筆に書き尽せん道を通りて来た。なれど千年も二千年も通りたのやない。僅か五十年。五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えばいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。」とご教示下さいます。

このおさしづの大意は、言葉でも表現できず、筆をもってしても書き尽くせないような容易ならぬ道を通ってきたのである。しかし、それとても千年も二千年も通ったのではない。僅か五十年の間のことであった。その五十年のひながたの道すがらを、五十年とか三十年通れと言えば、おいであろう。しかし、神は、前たちにとっては、むずかしい二十年も十年も通れとは言わない。十年のうちの、いわば三つ、三年の道を通れと言うのである。その三年といえば、苦労の五十年を通った教祖ひながたの道すがらから見れば、三日くらいのものである。それを最後まで通りきればよいのである。わずか千日間の道を通れと言っているのである。実は、その千日の間を通るのが容易なことではないのである。教祖によって示されたひながたの道のほかには、陽気ぐらしへ通ずる道はない。とひながたを通ることの心構えと大原則を教えて下さいました。

ここで、教祖のひながたをたどられた先人のご足跡を、稿本天理教教祖伝逸話篇から拝読してみたいと思います。

五六「ゆうべはご苦労であった」

本部神殿で、当番を勤めながら井筒貞彦が、板倉槌三郎に尋ねた。「先生は、何遍も警察などに御苦労なされて、その中、ようまあ、信仰をお続けになりましたね。と言うと、板倉槌三郎は、「わしは、お屋敷へ三遍目に帰って来た時、三人の巡査が来よって、丹波市分署の豚箱へ入れられた。あの時、他の人と一晩中、お道を離れようか、と相談したが、しかし、もう一回教祖にお会いしてからにしようと思って、お屋敷へ戻って来た。すると、教祖が、『ゆうべは、御苦労やったなあ。』と、しみじみと、且つニコヤカに仰せ下された。わしは、その御一言で、これからはもう、かえって、何遍でも苦労しよう、という気になってしもうた。」と、板倉槌三郎先生は答えられたそうです。

さて、ご承知の通り、網走大教会は、明治四十四年二月四日に設立し、今年で創立百十二年目を迎えました。又、昭和五十八年四月二十六日、当時の網走分教会が大教会に陞級させて頂き、今年で四十年という節目を迎えました。最近、ひながたをたどる、ということを強く意識する中で、大教会の先人・先生を振り返りつつ、網走月報を読み返しておりますと、昭和四十七年秋季大祭で、大教会四代会長様の神殿講話が目に留まり、その内容にひながたをとても身近に感じましたので、その講話を抜粋しながらご紹介したいと思います。

この講話でのお話は、四代会長様が、島村國治郎先生（高知大教会二代会長様）から直接お話を頂いた内容であります。今から七十九年前の昭和十八年八月八日、当時の南五条にありました網走分教会が、隣接していたお店の火事でその火をもらい全焼するという大節をお見せ頂きました。この途方もない事情の際に、直接網走までお越し下さり、理のご指導を下さった方が、島村國治郎先生でありました。

話を元に戻しますが、板倉槌三郎先生は、大阪にある恩智という村のお生まれです。明治九年、お兄さんの眼病を救けてもらいたいとの思いから、十七歳の夏、初めておぢばへ帰り、ある先生より「心次第で病はたすかる」とのお言葉に感動して入信され、三十歳で結婚されました。その後、八人のお子様を授かりますが、内六名がお出直しになられました。槌三郎先生は、明治四十年、四十八歳の時おぢばに引っ越され、お屋敷の住込人となられました。この翌年に、七男・知廣様がお生まれになっています。この当時のご家族は、槌三郎先生、奥様のひろ様、四男の茂春様、そして赤ん坊であった七男知廣様の四人家族であったと思われます。

大正十年頃、明治大学を卒業され、九月から修養科の前身である天理教校別科の講師として任命を受けられた四男茂春先生は、別科開始直前の八月半ばから熱を出され、わずか一ヶ月後の九月十二日、二十五歳という若さで出直されました。家の跡取りとして、いよいよ本部の御用をお勤めになる矢先の大きな節に、槌三郎先生のご心中をご拝察申し上げますと共に、この時、七男の知廣様は十五歳と更にお若く、お兄様を亡くされたお気持ちも合わせ考えますと言葉が見つかりません。

この事に関して、四代会長様は「あの豪気な先生も、八人授かった中の六人まで迎い取られ、この男と思っていた茂春先生が二十五歳で出直された。これには如何せん心を落とされた。どこ悪いという事もないんですが、床の上でゴロゴロしていらっしゃる。」と述懐されています。この大きな節を我が事と置き換えた時、どのように思案をするでありましょうか？

おそらく私なら「何でだろうか、どんな心得違いをしたのかなあ。」などと、塞ぎ込んでいると思うのです。ましてや、当時の槌三郎先生は、十七歳からこの大節にあう六十三歳まで、ひながた一条に御用を勤められ、当時は教会本部元老のお一人として、要職を勤められていたことと存じます。

そんな先生でも、どう懺悔したようであります。この時、山澤為造先生、松村吉太郎先生、高井猶吉先生、宮森與三郎先生など、名だたる本部の諸先生が元気をつけにおいで下さるようですが、どうしてもご気分は優れなかったようです。

ある日、初代真柱様の奥様である中山たまへ様が、島村國治郎先生に「國治郎、一寸おいで。板倉はんが力落として寝込んでいるから、あんた行って、今夜からおつとめに出てくるようにしておいで。」と仰ったそうです。当時、島村先生は三十代半ばと想像します。その先生が、本部の元老先生のところに行って「おつとめに出て下さい。」と伝えに行く。

この重大なご命を頂いた島村先生は、なんと言ったらよいものかと思案に困り、かんろだいでどれほど座っていたか、又、教祖殿に行って、教祖の御前で何とか言葉を浮かばしてもらいたいとお願いしたが、結局浮かんでこなかった、ということです。そこで、たまへ様が「國治郎、行っておいで」と仰ったんだから、行けば何とかなるだろう、と思って思い切って槌三郎先生のお宅に行かれました。

ご自宅について「ごめんください。」と言ったところでお返事もなく、お部屋は分かっているので中に入り、静かに戸を開けてみると、槌三郎先生は、布団の上で向こうを向いて休んでいらっしゃる。何とか言葉を申し上げねばと思ったけれども言葉が出でこない。

そこで、力をふりしぼって、「先生、しんどいでしょうね。」と言った。すると、先生は向こうを向いたまま、「しんどいわい！」と大きな声で言われ、その言葉には、「余計な事は言うな。うるさいわ。」という声の様にも聞こえたそうです。

どれ程の時間が経ったか知らなかったけれど、突然、島村先生は、槌三郎先生に向かって両手をついて「信者様に教祖ひながたのお取り次ぎは、先生する資格はございませんな。」と言われました。この言葉に、槌三郎先生は、ガバッ！と起き上がって、「何！島村」と仰った時には、数発ぶたれるかと思ったそうです。その勢いは、本当に怖かったと島村先生は述懐されています。

槌三郎先生は、すかさず「島村、今何といった？その訳を言え！」と仰せられるので、島村先生は、「教祖は、五十六歳の時に夫・善兵衛様（御年六十六歳）を亡くされています。その後、七十八歳で末女・こかん様がお出直ししていらっしゃる。こかん様の御年は三十九歳です。そして、教祖八十四歳の時、ご長男の秀司先生（御年六十一歳）、その翌年、秀司先生の妻まつえ様が（御年三十二歳）出直されました。

こうしてお子様に次々と先立たれ、明治十五年当時、教祖八十五歳の時、お屋敷で一緒に住まれていた方々は、教祖、初代真柱様（十七歳）、たまへ様（六歳）、そして、初代真柱様のお姉様にあたる梶本ひさ様（二十歳）の四人でした。教祖は、お孫様の三人と暮らされていたのです。それでも、教祖は、陽気に、我々子どもかわいい一条に、

世界だすけ一条にお通り下さった、その教祖ひながたです。」と、島村先生が、無我夢中で申し上げたところ、槌三郎先生は、島村先生の手をとって、「島村、よう言うてくれた。我が事になるとわからんわい。よう言うてくれた。」と仰られたそうです。

この時、槌三郎先生は、二十五歳の息子・茂春先生は亡くしたけれども、まだ十五歳の弟・知廣先生がいる、教祖ひながたを拝すれば…。とご自身の心をグウッと奮い立たせた事とご拝察するのです。

この後、奥様のひろ様に「おひろ、酒を一本持って来い」と仰って「島村嬉しいわい、今まで仲間が慰めに来て下さったけれども、そこまでは気がつかなかった。嬉しいわい。さあ、一杯やろう」と仰ったそうです。そして、島村先生は、本題であった「先生、今晩から夕づとめに出てもらえますか。」と伺うと、槌三郎先生は「出るわい、出るわい。」とお返事下さった、とのことです。

島村先生は、すぐさま、親神様・教祖にお礼を申し上げて、その足で、たまへ様の元に事の流れをご報告に行かれました。すると、たまへ様は「よくもまあ、ようそんな事、お前言うたなあ。」と言って驚かれたそうであります。そして、「ようやってきた。ご苦労さん。」とお褒めの言葉を下さったそうであります。

私は、たまへ様の「ご苦労さん。」というお言葉が、何故か板倉槌三郎先生が、警察の豚箱に入った翌日に、教祖が、『ゆうべは、御苦労やったなあ。』と言われたお言葉と重なって思えたのです。そして、昔の先生は、教祖に直接たすけられ、導かれてご恩報じの道を無我夢中でにをいがけ、おたすけに歩かれました。もしも、自分が島村先生の立場だったら、このような話を子どもさんを亡くされた大先輩に言えるだろうか？もし、自分が、八人子どもを授かり、期待していた跡取りに先立たれたら、板倉先生と同じように、ひながたの道を求めて、神一条の精神でお道を通らせて頂く気概が持てただろうか？と真剣に思案しました。

あくまでも、ひながたは、その時代に教祖だからできたことだとか、先人も教祖に伺いながら、お導き頂いたからこそ通れたのではないか。いくら頑張っても、昔のようにご守護を頂けず、今の私には難しいのかなぁという思いもありました。そんな時に、目が覚めるお言葉に出会ったのです。

真柱様は、今から十年前の立教百七十六年秋季大祭で、「ひながたの道が通れんような事ではどうもならん。」と繰り返し仰っているということは、どんな時代になろうが、私たちの心一つで必ずひながたの道を通れるということでありましょう。また、だからこそ、手本ひながたをお示し下さったのであります。と心強いお言葉を下さいました。

おさしづに「難しい事は言わん。難しい事をせいとも、紋型無き事をせいと言わん。皆一つ〳〵のひながたの道がある。ひながたの道を通れんというような事ではどうもならん。（略）ひながたなおせばどうもなろうまい。」とありますす。このおさしづの最後の「ひながたなおせばどうもなろうまい。」の「なおす」という言葉の意味は、修理するという意味ではなく【しまいこむ】という意味で、この大意は、ひながたをしまいこんでしまって、通ろうとしないようなことでは、親神様の親心、教祖のひながたは無意味になってしまう。という意味になります。

真柱様は続いて「私たちがひながたの道を通るとは、その形をそっくりまねることではなく、常に教祖のたすけ一条のひながたを念頭に、今このような状況で、教祖ならばどのように思召になるだろうか、教祖ならどのように行動されただろうかと、ひながたに照らして思案し、それに少しでも近づけるよう行動することだと思うのであります。その積み重ねが、をやの思いに近づく成人の歩みとして身に付き、自ずと道の信仰者らしいにをいを醸し出すことになると思うのであります。」とお話下さいました。

私は、このお言葉に胸がスーッと開いた心地がしました。そうか、この時代でも、自分が通らせて頂けるひながたの道があるんだ。あまり背伸びをする必要はないんだ、そう思えたのです。今までは、先人の成功した姿と申しますか、おたすけ名人になりたいとの思いから、どこか自己研鑽に力が入りすぎて、足元や身近な方々との協力、一手一つの和が足りていないことに気がつきました。

ひながたの道は「口に言われん、筆に書き尽せん道」とも仰せ下さるように、楽しい楽々の道ではなく、むしろ艱難苦労の道であると思います。しかし、どんな事情や身上をお見せ頂こうとも、常に教祖を、元祖お母さんと思って、どんなことでもお話して、もたれて、素直にひながたの道を歩む心を定めれば、必ずたすけて下さると思うのです。だって私達は、教祖の子どもなんですから。

この先も、様々な事情や身上をお見せ頂く日もあると思いますが、先を楽しみに年祭活動を、ひながたを素直な心で共々に通りきらせて頂きたいと思います。

ところで皆様、今の「教祖と自分の心の距離は、どのくらいですか？」

おふでさきに、

にんけんをはじめたをやがもう一にん　どこにあるならたつねいてみよ　（八―75）

教祖140年祭

こかん様に続く会

8月8日、こかん様に続く会を開催させて頂いた。

支部長様より、こかん様のお話を聞かせて頂き、練り合い後、昼食を頂いて解散した。（参加者2名・担当者1名）

少年会雅楽講習会

8月12日、夕づとめ後に雅楽講習会が開催された。

なかなか雅楽にふれる事がない子ども達に、少しでも興味を持ってもらおうと、今回は、各楽器の説明や、実際にどんな音が鳴るのかなどを講師が説明した。

今後、子ども達がそれぞれ楽器を選び、練習して雅楽が演奏できるようになってもらえるように、講習会を続けていきたい。

夕涼み会

8月12日、育成部主催の夕涼み会が行われた。

こどもおぢばがえりに参加出来なかった子ども達などに、何か一つ思い出を作ってあげられたらという思いから、各教会に声をかけ、たこ焼き・焼き鳥・かき氷・アイス・ジュースの材料などを御供頂き、子ども達に無料で配らせて頂いた。

最後にはみんなで花火をさせて頂き、楽しいひと時となった。

全教一斉にをいがけデーに向け理づくりの活動

9月は、にをいがけ強調の月。月末の28日から30日の3日間は、全教一斉にをいがけデーが実施される。

大教会布教部では、本部布教部の声を受け、教祖140年祭三年千日の初年に迎える全教一斉にをいがけデーに向けて、理づくりをさせて頂こうと、3ヶ月前の7月から「理づくりカレンダー」を各教会に配布して、活動を促進した。

各教会では、教会長夫妻が先頭に立って、にをいがけ活動を行い、活動内容をカレンダーに記入しながら、勇んで、心定め達成に向けて歩ませて頂いている。

全教一斉にをいがけデー 理づくりカレンダー

教会名　　氏名

2023　9　September

日	月	火	水	木	金	土
27	28	29	30	31	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12 大教会月次祭	13	14	15	16
17	18 敬老の日	19	20	21	22	23 秋分の日
24	25	26 本部月次祭	27	28 にをいがけデー	29 にをいがけデー	30 にをいがけデー

★理づくり項目　（該当番号を日にち欄に記入。複数可）

番号	理づくりの内容
①	散歩（パンフレットなどを持参）
②	地域活動（町内会、PTA他）
③	教会外でのひのきしん（教会前のゴミ拾い、公園、施設など）
④	神名流し
⑤	路傍講演
⑥	戸別訪問（パンフレット投函含む）

立教186年 人のご守護 心定め

初席者	ようぼく	修養科修了者	教人
69名	44名	34名	21名

成果（8月末現在）

16名	6名	4名	2名

動静

出直

▼誠央分教会所属・森精子様は7月8日出直された。享年94歳。葬儀は7月10日みたまうつしが、翌11日告別式が札幌ベルコ会館にて永井康幸・誠央分教会長斎主のもと執行された。

年祭

▼誠央分教会所属・森精子の霊様の50日祭、合祀祭が8月20日誠央分教会にて永井康幸・誠央分教会長祭主のもと執行された。

▼誠央分教会所属・加賀谷忠の霊様の50日祭、合祀祭が2月7日、誠央分教会にて永井康幸・誠央分教会長祭主のもと執行された。

▼誠央分教会所属・森勝幸の霊様の5年祭が2月18日、誠央分教会にて永井康幸・誠央分教会長祭主のもと執行された。

合祀祭・納骨式

▼直轄所属・大箭一男の霊様の合祀祭が8月7日、大教会の祖霊殿にて、引き続き網走潮見墓園にて納骨式が大教会長祭主のもと執行された。

神実様移転鎮座祭

▼直轄所属・網三講（講元・三幣寛志）では8月25日、移転鎮座祭が天理市東井戸堂町の自宅にて大教会長夫人祭主のもと執行された。

8月人のご守護

○中席者（7名）

女満別　福田和彦
　　福田綾子
誠陽　伊藤正将
東網　栗山蒼生
　　栗山萌里
網新　新川愛貴
誠綱　木沢巴菜

○おさづけの理拝戴者（2名）

東網　栗山蒼生
　　栗山萌里

○教人登録者

満金　岩原榮

育英会寄付者

大箭朋彦様（父合祀）
瀬川定自（志）
宗稚分教会（志）
誠央・森家様（母葬儀）

大教会8月の動き

1日　若井農園さくらんぼ狩り
2日　少年会こどもおぢばがえり団体戻り
4日　みそか会
5日　お話し会
6日　役員会。直轄世話人会。縦の伝道日
7日　会長、大箭一男の霊様合祀祭、納骨式祭主つとめる
8日　こかん様につづく会。防火訓練
9日　網走支部例会会場
10日　役員会会議
11日　教祖140年祭網走おたすけ委員会会議
12日　月次祭。役員会会議。連絡会。夕涼み会
13日　教会長夫妻練り合い
16日　会長夫妻、山本正義、綾子様年祭参拝
17日　会長、札幌信者まわり（19日まで）
20日　縦の伝道日
23日　会長、おぢばがえり。詰所23会
24日　会長、本部神殿奉仕つとめる
25日　会長、本部災救隊会議出席
26日　本部月次祭遥拝。会長、災救隊幹部研修会参加。結城和広役員、本部神殿奉仕つとめる
27日　会長、かなめ会出席。細木善信役員、本部神殿奉仕つとめる。
30日　縦の伝道日みそか会

8月　月次祭　8/12(土)

〈参拝者数　約100人〉

祭典役割	祭員	祭主	扈者	指図方	賛者	神殿講話
		大教会長	三幣 藤山 敦志 重善	丸山 一徳	田中 遠藤 三澤 清水 井 浩繁 春二 知雄 広幸 志	三幣 正志
		てをどり		地方	小りが鼓 す ね 太鼓 拍子 ちゃん ぽん 笛	胡弓 三味線
座りづとめ		大教会長 新山一人 丸山正徳	藤山 栗林 大教会長夫人 リツ子	青山 大山 藤山 正博 雅人 重善	三幣 結城 瀬川 桐谷 澤田 栗林 正志 和広 定自 厚平 忠和 徳正	三幣 丸井 輝子 山の道 り子 恵
前半		遠藤 清水 信喜 明広	青山 斎藤 澤田 岩原 清水 遠藤 聖子 知子 裕子 繁	田中 小針 結城 敏繁 和文 広	桐谷 遠田 吉村 菅原 在原 三幣 善広 眞明 光正 道宏 敦彌 志	細木 大山 朱美 泰子 真理
後半		永井 康幸 浩二 知幸	菅原 栗林 三幣 遠藤 水井 美代 真弓 直子 美子	三幣 正志 三澤 春雄 藤井 広志	奥野 増田 安田 眞壁 瀬川 新川 直治 裕一 光広 正教 定自 正美	瀬川 眞壁 三幣 祐子 香織 有子